

〔博士論文要旨〕

障害児教育の社会学

—発達障害をめぐる教育実践の相互行為研究—

Sociology of Education for Children with Disabilities: Interactional Study of Educational Practice on Developmental Disabilities

鶴田真紀*

TSURUTA, Maki

<本論文の構成>

序章 障害をめぐる〈私〉の自分史

第1節「初発の関心」から「障害と教育の日常の解読」へ

第2節 本論文が対象とする障害と本論文の構成

第1章 教育の医療化現象と脳科学の〈知〉

第1節 発達障害と教育の現在

第2節 自閉症の生物学的研究

第3節 論文の具体的検討

第4節 イデオロギーとしての脳科学の〈知〉

第5節 相互行為のなかで達成される障害の探究にむけて

第2章〈障害〉と〈教育〉への視点

第1節 障害学の視点

第2節 社会構築主義の視点

第3節 エスノメソドロジーの視点

第4節 本論文の視点

第3章 映像データ分析という方法論

第1節 教育社会学の観点からの障害児教育研究

第2節 教育社会学・障害児教育研究と映像データ分析

第3節 調査概要とトランスクリプトの凡例および補足

第4章〈障害児であること〉の相互行為形式——能力の帰属をめぐる教育可能性の産出

第1節 はじめに

* 創価大学教育学部教育学科准教授

第2節 相互行為形式への着目

第3節 参加者の記述実践と〈教師であること〉を行うこと

第4節 おわりに——個人的現実を想定する形式の操作的な達成

第5章 自閉症児の言語獲得をめぐる相互行為系列——療育実践場面の分析を通して

第1節 はじめに

第2節 療育施設の紹介と予備的な検討

第3節 IRQAE 系列の連鎖的反復

第4節「できる」の追求にみる「できなさ」の強調と将来的な発達可能性

第6章 児童間相互行為における非対称性の組織化——メンバー性の確認作業をめぐる

第1節 はじめに

第2節 児童間相互行為の分析

第3節 相互行為の非対称性と障害の多層性

第7章 ADHD 児の問題行動と服薬をめぐるエスノグラフィー

——学校において服薬の効果が妥当性のあるものとして構成されるしくみ

第1節 はじめに

第2節 ADHD の基本的特徴と治療薬

第3節 分析に先立つ情報

第4節 学校における薬カテゴリーの運用

第5節〈薬によって不注意、多動性、衝動性が抑えられる〉という認識が学校において妥当性のあるものとして構成される「しくみ」

第6節 補節——コウスケと「薬」をめぐるその後の展開

終章 障害児教育の社会学へ向けて

第1節 経験的研究の概括

第2節 概括からの示唆

第3節 障害児教育の社会学と今後の展開

【要旨】 本論文の関心は、発達障害が相互行為において達成されるものであることを明らかにすることにある。具体的には、第1に障害を観察可能とさせる相互行為のあり様それ自体がどのようなしとげられているのかを読み解いていくとともに、第2にその時（障害が相互行為において観察可能となる時）、そこで何が行われているのかを明らかにすることを試みる。この延長上に、参加者の〈障害〉と〈教育〉をめぐる「期待」や「想定」、「志向性」等に対する関心が位置づけられる。いいかえれば、本論文は、「障害」を、それを有する個人の心身の問題へと還元するのではなく、場の組織化のあり方や参加者が相互行為を進行させるやり方の問題として捉えなおそうとするものである。

序章では、まず、〈私〉をめぐる経験から、障害はその場の状況のなかに、あるいはまさしくそのようなものとしてなしとげられた相互行為のなかにあるという本論文の問題関心を立ち上げる。そして、本論文が対象とする「発達障害」の射程について論じる。すなわち、本論文が対象とするのはDSMをはじめとしたさまざまな公的定義によって示された発達障害ではない。人びとが活動のなかで運用している障害カテゴリーであり、社会のメンバーである人びとにとって「頭のなかにある」と語られ、実際にそのようなものとして扱われているような、相互行為のなかにある「障害」であることを述べる。本論文の構成は、下記の通りである。

第1章では、まず発達障害をめぐる特別支援教育の今日的状況と教育領域における医療化の進行（教育の医療化）との関連性について論じる。次に、そのような教育の医療化を推し進める〈知〉として、特に自閉症を対象とした脳科学に基づく研究を具体的にとりあげ検討する。そして、「実験」という状況に埋め込まれることによって研究が「適切な」ものとなっているのであり、そのような研究自体が自閉症を「脳」に帰属させていく1つの社会的達成であることを論じる。その上で、脳科学に基づく障害研究が社会に、そして教育に影響する可能性について述べ、「相互行為への着目」という本論文の視点を提示する。

第2章では、上述の本論文の視点をより明確にするために、障害学、社会構築主義、エスノメソドロジーという3つの視点を概観していく。障害学は「対象」という観点から、また社会構築主義は「方法」という観点から、本論文にとって無視することのできない学問的潮流を形成している。そのなかでもとりわけ本論文は、そのつどの状況における参加者の複雑な実践を読み解くという関心からエスノメソドロジーの視点に依拠しており、「エスノメソドロジーに触発された障害児教育研究」として組織化されていることを述べる。

第3章では、まず教育社会学の観点から障害児教育に焦点をあてた国内の研究を中心に概観し、次に日本ではそのような研究の蓄積はまだ十分ではないなかで、特に映像データをもとに詳細に検討した研究についてはさらに少ないことを指摘する。本論文が映像データ分析を主な方法として採用する目的は、参加者自身のみならずその場にいる観察者もまた気づかないような、身体的行為に接近するためでもある。特に、経験的研究で扱うような「発話がまだない」とされるような障害のある児童をめぐる相互行為や児童たちが互いのメンバーシップをめぐるまいや視線で確認し合うような作業に着目する際には、映像データ分析を試みる意義が認められる。参加者がそのつどの場面で「見られてはいるが気づかれていない」やり方で合理的に達成している障害を「再現」させることが「障害の観察可能性」へ接近する1つのやり方なのであり、それは映像を「データ」として詳細に検討し、徹底して場面を観るなかでこそ可能となるのである。一方、本論文の経験的研究の一部では、エスノグラフィーを採用している。エスノグラフィーではフィールドノートという作成者の視点を通して再構成された資料を分析することで、障害の構成過程にまた異なる観点からの接近を試みている。

第4章以降は、それまでの章で述べられてきた事柄を、具体的データをもとに明

らかにしていく。すなわち、そこで問われるのは、前述したような学校という場において障害を観察可能とさせる相互行為はどのようにして編成されているのだろうかということであり、相互行為と〈障害〉と〈教育〉をめぐる人びとの営みの解明である。このような関心にもとづき、養護学校（現、特別支援学校）、療育、通常学級といったいくつかの異なる場面を検討していく。

第4章では、学校において〈障害児〉と〈教師〉との相互行為に特徴的な形式とはいかなるものであるかを検討し、それは「個人的現実を想定する形式を操作的に達成していく形式」であることを明らかにする。そのような相互行為形式のなかで〈障害児であること〉はなしとげられていくのである。そして、この特徴的な形式をもとに教師たちは〈障害児を教育すること〉を行っており、障害児教育は、少なくとも局所的場面では無能力さに対する教育可能性をその児童から切り離す一方で、「その児童でもできること」、つまりその時点で可能な有能さに教育可能性を見い出している。すなわち、〈障害児を教育すること〉とは、無能力さを切り離し有能さを結びつけていく実践であると結論づける。

第4章で扱うのは、教師たちがあえて児童の「障害」に直接的には焦点をあてない実践である（もちろん、そのことが逆説的に、ある児童が「障害児であること」を観察可能とさせているのだが）。しかし当然のことながら、すべての実践がそのようなあり方をとるわけではない（むしろ、障害児教育とは障害を焦点化させていく実践である）。そのような第4章の実践とは対極にあるような場面が、第5章において検討される、徹底的に障害に焦点化し、シビアに障害の克服を求めようとする性格を有した「療育場面」である。

第5章では、自閉症児に対する言語獲得をめぐる療育実践場面を検討する。この場面において療育を受けている自閉症児は、課題をクリアすることができず何度も失敗してしまう。それでも療育者は、「できた」ことには決してしない。やや執拗なやり方をとっているとみなせるほどに、自閉症児の「できなさ」を強調しつつ「できる」を追求し続ける。療育者がそのような追求し続けたのは、何より将来的な発達可能性を志向しているからであると考えられることを明らかにする。そしてその発達可能性とは、自閉症児の言語獲得に関していえば、年齢という発達段階に応じた言語獲得が「裏切られた」なかで行われており、その言語獲得に将来的に確実な「保証」があるわけではないものである。そのような不確定な要素があるからこそ、「いま－ここ」の実践のなかに将来的な発達可能性が強く求められ、「いま－ここ」を通して将来の「できる」を追求し続ける「信念」が、療育に関わる人びとの希望をつなぐ「療育という現実」を支えているのではないかと論じる。

第4章、第5章では、その場の実践に埋め込まれた特有の相互行為形式を明らかにしているが、そのような相互行為形式の達成は、その場の人びとがいかなるカテゴリーの担い手として参与しているかに関わっている。その意味では、第4章、第5章において焦点をあてたのは、「教師と児童」、「療育者と療育児」という「大人と子ども」というカテゴリーに関連する担い手であった。一方、第6章では児童間の相互行為にも着目し、通常学級の場面を検討する。

第6章では、児童間の相互行為をとりあげ、集団のなかで非対称的な相互行為が組織化されるとき、参加者はメンバー性の確認という課題に直面することを検討する。そして、教室において、有徴性を付与されながらも、直ちに「排除」へと向かうわけではなく、メンバーとして独特の地位を与えられて教師や児童といった標準的なメンバーと関係を取り結ぶ。そのような非対称性を前提として授業内の相互行為に参加するあり方が観察されることを明らかにする。同時に第6章の分析から示唆されることとして、「障害」というこの2文字では回収しきれないさまざまな経験世界が参加者の間には広がっている可能性（すなわち、障害の「多層性」）について論じる。

第7章は、それまでの経験的研究の各章と方法論的に異なりエスノグラフィー研究として展開される。そして、学校においてADHD児の「問題行動」に直面した際に、＜薬によって不注意、多動性、衝動性が抑えられる＞という認識が妥当性のあるものとして構成される「しくみ」とはいかなるものであるのかを検討する。そもそも、ADHD児の「問題行動」をまさしくそれとして浮かび上がらせるものとして、「45分」という時間単位での活動の区切りが、構造的制約として教師の活動を規定している。だが、そのような要因はこの場面全体を通して自明視されている。このような構造的制約に加えて、次の2点の「しくみ」により、薬は効果があるものとして教師たちによって受け入れられていることを明らかにする。それは第1には、ADHD児の「問題行動」に直面した際に、教師によって薬カテゴリーが「原因探究の語彙」として運用され、教師にとっての責任回避の実践として機能していくということである。そして第2には、たとえ＜薬を飲んでも不注意、多動性、衝動性は抑えられない＞あるいは＜薬を飲まなくても不注意、多動性、衝動性が抑えられる＞という経験的事実が確認されたとしても、その認識は反証されない。すなわち、＜薬によって不注意、多動性、衝動性が抑えられる＞という認識が「規範」として機能しているということである。

もちろん、本論文は発達障害が観察可能となる相互行為を「網羅する」することが目的ではない。あくまでもその一端に迫ることによって、〈障害〉と〈教育〉、そして〈社会〉を読み解く視点の提供を目指している。以上のような展開を経て、終章では本論文における発達障害をめぐる教育実践に関する総括的知見を提示した。まず、〈障害児であること〉とは、〈教育すること〉特有の構造的制約を背景化した上で、「できる」「できない」あるいは「してしまう」などの児童の能力性と結びつけて非対称性を浮かび上がらせるような相互行為形式が適用された結果であると定式化した。そのような相互行為形式の適用の結果として、障害が組織化されるのみでなく、〈障害児（に）教育（すること）〉や〈有徴性の付与〉が行われるのである。そして、行為と発達障害というカテゴリーとの循環的な関係をもたらし「つながりを作り出す」実践が、当該の人物に「発達障害がある」という現実を作り出すとともに、そうした実践を容易なものとしているのが、発達障害というカテゴリーの「あいまいさ」であることを論じた。